

近代中国語におけるヨーロッパ地名の変遷

— 『察世俗毎月統計伝』と『地理全志』を中心に

沈 和

Transition of European Geographical Names in Modern Chinses:
Focusing on *Chinese Monthly Magazine* and *Universal Geography*

SHEN He

Abstract

In this paper, we surveyed William Milne's *Chinese Monthly Magazine* and William Muirhead's *Universal Geography* and carried out a textual and content-based analysis of both works in relation to geography. Viewed through the lens of missionaries and missionary work, a detailed discussion is undertaken in relation to changes in European geographical nomenclature and differences in knowledge. Also, consideration will be given to methods of reading and writing European geographical place names, rules of translation, their relevance, relationships of inheritance, as well as the author's position in terms of etymology. First of all, the position of the two works and the purpose of both will become clear. Both William Milne and William Muirhead were missionaries from the London Evangelistic Association whose fundamental role was to carry out various missionary duties. From a deep analysis of segments of the text from the *Chinese Monthly Magazine*, it was found that not only the depiction of geography but also the connection of Jesus's doctrines can be found in the beginning of the whole sentence. However, William Muirhead does not refer to the doctrines of Jesus, but, instead, uses knowledge related to natural geographical features and terminology, such as the equator, points of latitude, and meridian, and utilizes the scientific methods of location, society, history, folklore, customs, regime, specialties of countries Introduced and more "objective, complete and content-oriented" from the *Chinese Monthly Magazine*, the description method is also concise and easy to understand. In *Universal Geography*, we introduce the main European countries to each reader according to the form of 'Zhi' and can also see the normality of the book and the systematic nature of the classification

methods that are employed. In addition, the Western missionary William Milne is noted to have employed the lofty phrase “My China” to make Chinese readers accept the veracity of his writing. Meanwhile, in an article entitled “Great British Kingdom”, Western missionary William Muirhead appeared to take a more neutral position and objectively introduced the British information. From the two works, the changes in European geographical place names have revealed the process of cultural integration, character and language transformation. It is believed that it took the core of cultural negotiation using two forms of language, character change and cultural integration.

Keywords : Western missionary, *Chinese Monthly Magazine*, *Universal Geography*, European geographical names

はじめに

大航海時代以来、地理学に関する発現は大きな飛躍を遂げた。冒険者達は新しい大陸を探しながら、新地域を命名した。一方で、宣教師達は媒介として、地理学の知識を世界各国に伝えた。「西学東漸」の波とともに、明末清初に来華した宣教師達は、布教を順調に行うため、西洋知識を紹介する洋書及び新聞を翻訳、出版した。「西学東漸」の第2波とともに、1815年の夏、プロテスタント宣教師のモリソンとミルンは共に『察世俗毎月統計伝』を創刊した。『察世俗毎月統計伝』は最初の中国語による近代的な新聞として、イギリス教会の教義と倫理道德に基づき、根本的な任務は教義を広げることだが、西洋の歴史、地理、習慣及び科学などを紹介した。中の地理学に関わる文章は8編であり、全て第六巻に集まった。28個のヨーロッパの国名、各国の都、政体及び言語を記載されている。内容的には非常に簡単だが、進歩性、文化交渉学及びマスコミの領域に重要な歴史位置があるだろう。ちなみに、同時代の『地理全志』（1858）も地理学の名作である。

各書の中に記載されている地名の書き方、読み方、発音の規則、世界地図、国についての描写などは著者、主編者により様々である。従来、地名の書き方、読み方、翻訳の規則は時代と共に変遷しつつある。外国語から中国語への地理的名称の変換方法と特定の地域の地名の成り立ちや各地域の命名法則なども時期により違うため、地名統一化の重要性は疑うまでもない。地名統一化は、特定の基準に従い、地名を標準化し、修正する方法である。このような方法は地名の形、語源、文法、発音、意味、地名の規範化に役に立つ。地名に残された古代言語の要素によれば、語源を推測することができる。地名の中の方言語彙の研究は、方言の分布と意味を決定する。科学的言語の分析方法及び記載方法に基づき、異なる国の地名標準化作業を順調に行うのは、外国語から中国語への地理的名称の変換の重要な一環である。地名の変遷から見ると、文字の変化、中国固有文化と宣教師達が連れて来た外来文化の融合を示しただろう。研究する価値があると思われる。

その二つの文献に記載されているヨーロッパ地名の書き方、読み方、翻訳の規則、語源はどんな関連性と継承関係があるのか。文献に収録したヨーロッパ地名の差異は著者の立場と関係するのか。具体的にどんな形で現れるのか。又は、文字の変化とともに、後期の作品に載せている地名はどんな規則に従って統一化、標準化するのか。最後は、ヨーロッパ地名の変化は、文化融合、文字と言語変容の過程を解明できるかどうかと検討する。以上のように、二つの文献を比較したうえ、言語、文字の変化と文化融合という二種の形態を用い、文化交渉の核心を呈する。

一、『察世俗毎月統計伝』に見られるヨーロッパ

1. 「英國土産所缺」について

「英國土産所缺」¹⁾はヨーロッパの国を紹介する独立した文章として、『察世俗毎月統計伝』第六巻に載せられている。英国で生産できないものを記述し、記述方法（文法構造）が特殊的である。最初の「夫天下之地土有多般，有高，有低，有寒，有熱，而所種之物宜合乎其地土也。此國產這樣，彼國產那樣物，非偶然之事，乃是造萬物之神天所定如此，致教諸國存相通交往之理……可補彼此之缺。如此，則非但以四海為一家，乃以普天下萬國為一家也……」の記述では、国々の産物が海拔、温度によって異なると指摘している。しかし、それは偶然ではなく、互いに不足分を補充するのが神様の意識だと強調し、「天下一家」の思想を表している。

以下では、一から八に分け、英国で生産できないものを記述し、関係する情報を解説する。

「一、不産茶也……茶独在我中國而盛産……所以今英國，與有羅巴列國，又花旗國，都來中國買也。」の記載から見ると、英国ではお茶が生産できず、中国でお茶が盛んに産出できるということを述べている。ヨーロッパ諸国、アメリカと中国の貿易関係についても言及している。

「二、不産蔗也。蔗者，人所以成糖也。此國之地土不合蔗，故其用的糖大概由屬亜米利加那方之西印氏亞各海洲，而來也」と書かれているように、英国ではサトウキビが生産できず、アメリカの西から輸入していることがわかる。

「三、不産烟草也。前時在東邊印度各國，與中國，並無是物。到尋着亜米利加地時，則有羅巴列お國與東邊各國人，方知有烟草……在英國，今亦有人種烟，但所産不多，其所用之烟大概半由亜米利加來也」と述べているように、英国では煙草が生産できず、中国とインドも生産できない。アメリカを訪ねた時、煙草が知られていた。英国において、煙草を植えている人がいるが、生産量はそれほど高くないため、英国人は煙草の半分以上をアメリカから輸入していた。このような記載されている内容から見ると、当時の煙草についての需給関係と産地がわかる。

「四、不産棉花也。在印度列國，多種棉樹，又在中國山東，河南，陝西，山西，湖廣，各省……英國用的棉花之大半，由孟雅拉，孟買等處，來也。」と書かれているように、英国では綿花が生産されておらず、インド、中国の山東、河南、陝西、山西、湖南、広東などで綿花が生産されていた。英国の綿花の多くはベンガル、ムンバイから輸入されたものである。アジアにおいて、インドと中国綿花を栽培する地域と英国の綿花輸入状態が以上のことからわかる。

「五、在英國少種桑樹，少養蚕種，所以無多絲也。上古，獨中國有桑蚕，別國都無……年年有有羅巴列國，又花旗國船來中國買絲，與紬鞋等也」と記述されているように、英国では少量の桑の木を植えていた。蚕は少ないため、シルクが少なく、昔、中国のみ桑の木と蚕があった。

1) モリソン、ウィリアム・ミルンなど編集『察世俗毎月統計伝』、1815-1821年、大英図書館蔵、第六巻、9-11頁。

毎年、ヨーロッパ人とアメリカ人が来華し、シルク製品を購入していた。

「六、不産藍草也……英國所用的靛大概由印度列國來也。」と書枯れているように、英国では青草が生産できず、インドから輸入していた。

「七、不産鴉片煙也……中國亦不産鴉片煙……若善用之，則為好藥。用之過節，則會毒死人。其甚利害過于酒也」と書枯れているように、英国と中国でアヘンが生産できなく、適當の場合で使用すれば、良薬であるが、使い過ぎると、中毒になり、お酒より害は大きいとある。

「八、像椰，黄梨，柚，宮蕉，荔枝，柑，橙，等樹。英國的園丁亦有種……上所說之八様，不止英國不産，乃又屬有羅巴多國亦不産之也。」と書枯れているように、英国の園芸職人は、ヤシ、梨、柚子、バナナ、レイシ、オレンジなどを植えていた。しかし、英国のみならず、ヨーロッパ諸国も生産できなかった。

全文から見ると、著者は「我が中国」と自称し、中国人の立場に立ち、強国の英国の不産物を中心に、記述した。文章は、英国の不産物と中国の産物を比較し、中国と世界、英国と世界の貿易関係に言及し、記述方法が当時の読者に対して斬新であることがわかる。中国人の読者にとって、このような文章を読むのは喜美であっただろう。ヨーロッパの地名の書き方については、「英國」しか関連しないが、単一の国を中心にして描写する文章としては価値がある。一方で、西洋宣教師の立場と布教手段を反映したのだろう。

2. 「論有羅巴列国」について

「論有羅巴列国」²⁾は地理学の文章として、ヨーロッパの28個の国、都、政体及び言語を紹介した。その文章は二篇に分かれており、第一篇では、順番に28個の国の都、名称、構成を記述し、最後の部分では政体を述べている。

冒頭部分では「夫神天所造普天下萬地，今賢分之為四分。有羅巴之一亜西亜一分，亜非利亞一分，又亜默利加一分……此分約長一萬三千余里，又約寬九千四百余里。有羅巴之人數，約有一百五十兆口，即約一萬五千萬人也……」と書かれており、世界は神に創造され、ヨーロッパ、アジア、アフリカとアメリカ四つの部分に分けた。ヨーロッパの長さは約13000キロメートル、広さが約9400キロメートル、人口が150兆であると記述し、また、ヨーロッパの地名を以下の一から二十八の順番で記述している。

- 一．波耳士加勒，即西洋國。其京，日利士本。
- 二．士扁，即大呂宋國。其京，日馬得利得。
- 三．法蘭士，即佛郎機國。其京，日巴而以士。
- 四．尼得耳蘭士，即何蘭國。其京，日百耳五士勒士、此國舊京，日亜麥士得耳大麥。

2) モリソン、ウィリアム・ミルンなど編集『察世俗每月統計伝』、1815-1821年、大英図書館蔵、第六巻、15-18頁。

- 五. 應蘭得, 即英吉利國。其京, 曰倫頓。舊時三國, 今合為一國, 都共此名。又共名曰格烈百耳以恩。
- 六. 士未士耳蘭國。此國無王, 乃為列諸侯所治, 故無一定之京都也。
- 七. 士未點、即瑞國。其京, 曰士托何勒麥。
- 八. 顛馬耳革、即黃旗國。其京, 曰個便士斤。
- 九. 那耳歪國。其京, 曰革利士氏垂尼亞。
- 十. 耳五沙、即我羅斯國。其京, 曰比得耳士布耳革。此國地之半屬有羅巴乃屬垂西也。
- 十一. 百耳五是垂、即布路西垂國。其京, 曰百耳林。
- 十二. 波蘭得、即波羅尼亞國。其京, 曰個寧士百耳革。
- 十三. 撒甸以國。其京, 曰得耳以士顛。有三小國, 均名撒甸以, 即上中下撒甸以是也。
- 十四. 阿士得耳以垂國。其京, 曰腓然垂。此國亦名者耳馬尼, 但此是個總名包數國在內。
- 十五. 未士得法利亞國。其京, 曰門士得耳。
- 十六. 巴法耳以垂國。其京, 曰母尼革。有三小國, 均名巴瓦利亞即上中下巴瓦利亞。
- 十七. 紅加以、即江垂利亞國。此國分為上下江垂利亞, 上者, 京曰百利士布耳革, 下者, 京曰布大。
- 十八. 數垂比亞國。其京, 曰巴顛。
- 十九. 摩耳垂腓垂國。其京, 曰阿勒末字。
- 二十. 波希米垂國。其京, 曰百耳噯革。
- 二十一. 土耳其即度爾格國。其京, 曰根士但顛阿百勒。此國之半垂西垂之分。一半在有羅巴也。
- 二十二. 撒耳氏尼亞國。其京, 曰加革利亞利。此國管下另有四十個小海洲。
- 二十三. 西色利國。其京, 曰巴勒耳摩。
- 二十四. 意大利垂國。其京, 曰羅馬。
- 二十五. 尼百勒士國。其京, 曰尼百勒士。
- 二十六. 噯阿尼安噯勒士即七洲國。其京, 曰可耳付。此國有七海洲, 皆合為一國, 而其朝政, 乃由其各諸侯而發也。
- 二十七. 利士垂尼亞國。其京, 曰未勒那。
- 二十八. 得耳安西勒反以垂國。其京, 曰黑耳滿士達。

そして、その他に関しても「除此二十八國外, 還有甚多小國, 又此二十八國中, 一大半都有屬國, 今不得記其數也。

至論有羅巴列國之朝政、大概算之、則有君王二十八位。在其二十八位中、有三位稱皇帝者。有十一位稱王者。又有十四位稱君者也。像上所說第十、第十四、又第二十一之國君、俱稱皇帝。又上說之第一、第二、第三、第四、第五、第七、第八、第十三、第二十二、與第二十三之各國

君、俱稱曰王也。除其各皇、各王外、另有十四位君、為比王更小者。且不論是王是君、都自有發政之權、不用奏其三皇帝之何一也。但因其十四位君之各國不為大、而難得保存、所以其中數位、或與其十一王之二、而立約、以致有外國來犯其境界時、其所與約之皇或王者、乃出軍助之拒敵保國也。在西邊又有一樣朝政、比上三樣不同。像士未士耳蘭國、非有皇、亦非有王、亦非有君發政、乃為國中之各諸侯每年一次會集、商量國事。由其自中乃立一議班、而定一位做總理、以管國事也。上所說之各國、不論大小都有公、侯、伯、子、男等爵。又有各部、與各品之官員。又有取餉稅、又有出兵等事、如中國一般、只各有不同耳。」とある。

この28個の国以外は、小さな国があり、その28個の国の半分以上が属国を持っている。しかし、正確な数は明らかになっていない。

ヨーロッパの政体という、約28人の統治者がいた。その中の三人は「皇帝」と自称し、十一人は「王」と自称した。他の十四人は「君」と自称した。上述のように、ロシア、オーストリア、トルコの統治者も「皇帝」と自称し、ポルトガル、スペイン、フランス、オランダ、イギリス、スウェーデン、デンマーク、撒甸以國、撒耳氏尼亞國、西色利國の統治者は「王」と自称した。各「皇帝」と「王」を除き、残りの十四人の統治者は「王」より地位が低い者である。「王」と「君」の身分を問わず、自ら政事を執行する権力があり、「皇帝達」に報告する必要はなかった。この十四の国は力が弱いため、自衛できず、別の国と同盟を結び、戦争があったには、共に敵を撃退した。西側には別の政体があり、上述の三つとは異なった。スイスのような国では、「皇帝」、「王」など命令を出す人がおらず、諸侯達は毎年一回の集会に参加し、政事を討論した。諸侯達は議會を設立し、一人の總理大臣を選挙し、国のことを管理した。上述の国々は面積を問わず、「公」、「侯」、「伯」、「子」、「男」などの爵位があり、同時に、各種類の役人がいた。税金及び出兵の義務などもあり、中国と似ているが、異なるところもある。

原文から見ると、その時期のヨーロッパの状況がおおよそ明らかになる。各国の政体及び実力を簡単にまとめると、「皇帝」、「王」、「君」と自称する統治者の国は封建体制と判断できる。スイスの政体は特別、現代の議會共和制と似ていると考えられる。爵位、税金、徴兵の義務なども簡単に言及している。従って、この文章は、ヨーロッパの国名、各国の都、政体を紹介したものであることがわかる。しかし、文章の構成は非常に単調であり、国についての解説も少なく、国名と都の書き方のみ書かれている。国の面積、地理位置、人口、記事、地図などの情報は一切書かれていない。ヨーロッパ地名の書き方、読み方と解説に沿って、獲得できる情報を下記にまとめる

表1

ヨーロッパ地名の表記方		国の解説	現代地名
波耳士加勒、西洋國	利士本	なし	葡萄牙（里斯本） ポルトガル（リスボン）
土扁、大呂宋國	馬得利得	なし	西班牙（马德里） スペイン（マドリード）
法蘭士、佛郎機國	巴而以士	なし	法国（巴黎） フランス（パリ）
尼得耳蘭士何蘭國	百耳五士勒士、亜麥士得耳大麥	あり	荷兰（阿姆斯特丹） オランダ（アムステルダム）
應蘭得、英吉利國	倫頓	あり	英国（伦敦） イギリス（ロンドン）
士未士耳蘭國	なし	あり	瑞士（伯尔尼） スイス（ベルン）
士未點、即瑞國	士托何勒麥	なし	瑞典（スウェーデン） スウェーデン（ストックホルム）
顛馬耳革、黄旗國	個便士斤	なし	丹麦（哥本哈根） デンマーク（コペンハーゲン）
那耳歪國	革利士氏亜尼亞	なし	挪威（奥斯陆） ノルウェー（オスロ）旧称クリスチャニア
耳五沙、我羅斯國	比得耳士布耳革	あり	俄罗斯（圣彼得堡） ロシア（サンクトペテルブルク）
百耳五是亜、布路西亜國	百耳林	なし	普魯士（柏林） プロイセン（ベルリン）
波蘭得、波羅尼亞國	個寧士百耳革	なし	波兰 ポーランド（都を考証できない）
撒甸以國	得耳以士顛	あり	萨克森王国（多莱斯登） ザクセン王国（ドレスデン）
阿士得耳以亜國、者耳馬尼	腓然亜	あり	奥地利（维也纳） オーストリア（ウィーン）
未士得法利亞國	門士得耳	なし	威斯特法伦王国（カ塞尔） ヴェストファーレン王国（カッセル）
巴法耳以亜國、巴瓦利亞	母尼革	あり	巴伐利亚王国（慕尼黑） バイエルン王国（ミュンヘン）
紅加以、江亜利亞國	百利士布耳革、布大	あり	匈牙利（布达佩ス） ハンガリー（ブダペスト）
數亜比亞國	巴顛	なし	考証できない
摩耳亜腓亜國	阿勒末字	なし	摩尔达维亚公国 モルダヴィア公国（都を考証できない）
波希米亜國	百耳噯革	なし	捷克（布拉格） チェコ、旧称：ボヘミア王国（プラハ）
土耳其、度爾格國	根士但顛阿百勒	あり	土耳其（君士坦丁堡） トルコ（コンスタンティノープル）
撒耳氏尼亞國	加革利亞利	あり	撒丁王国（カリアリ） サルデーニャ王国（カリヤリ）
西色利國	巴勒耳摩	なし	西西里王国（巴勒莫） シチリア王国（パレルモ）
意大利亞國	羅馬	なし	意大利（罗马） イタリア（ローマ）
尼百勒士國	尼百勒士	なし	那不勒斯王国（那不勒斯） ナポリ王国（ナポリ）
噯阿尼安噯勒士、七洲國	可耳付	あり	希腊（雅典） ギリシャ（アテネ）
利士亜尼亞國	未勒那	なし	立陶宛（维尔纽斯） リトアニア（ヴィリニユス）
得耳安西勒反以亜國	黒耳満士達	なし	托兰希尔维尼亚公国 トランシルヴァニア公国（都を考証できい）

上述の表により、以下のことを明らかにした。まずは、ヨーロッパ28国の国名と各国の都の書き方は中国語で、一目瞭然で表記する。28国の中に簡単な解説を付けている国は17、解説なしの国は11である。また、17国の解説があるけれども、多くのは非常に簡潔で、国の構成と属する大洲だけ紹介した。次は、国名に対し、二つ以上の漢字の書き方がある国が15である。二つ以上の漢字の書き方がある都は2である。「數亜比亜國」というところは考証できず、他には、モルダヴィア公国、トランシルヴァニア公国の都も考証できなかった。さらに、現在既に滅亡した国は載せた。例えば、ザクセン王国、バイエルン王国、モルダヴィア公国、サルデーニャ王国、シチリア王国、ナポリ王国、トランシルヴァニア公国などはその時代のみにおいて存在する国である。その他、注意に値するのは、同書の現文で「意大利亞國」は今のイタリアではなく、当時の教皇国である。サルデーニャ王国、サルデーニャ王国、シチリア王国、ナポリ王国は今のイタリアのサルデーニャ島、シチリア島、ナポリである。ザクセン王国、バイエルン王国、モルダヴィア公国は今のドイツの境内にある。トランシルヴァニア公国は今のルーマニアの一部である。これらの国の地理を考察する際に、国の領土問題、名称は時代とともに変遷していることが伺えるだろう。たとえ同書におけるはヨーロッパ諸国についての描写が少なくても、当時ヨーロッパ諸国の国名、都、領土問題を明文で記載する地理学の専門書として考えると、『察世俗毎月統計伝』は一定の先進性があるとは過言ではないだろう。また、同書は早期の中国人が世界の地理学を身につける際には重要な役割を果たした。こうしてみれば、外国人宣教師は確かに、ヨーロッパ地名の書き方の変遷過程、外来文化と中国語の融合に極めて重要な中間者という役を演じたとは言えよう。

第二篇「論羅巴列国」³⁾では、第一篇のヨーロッパ各国を表示する順番に従い、ヨーロッパ各国の言語を紹介している。

「一、西洋話 二、法郎機話 三、士扁話 四、意大利亞話 俱由拉定話而出，用拉定字，但其聲音与文法則俱各別取其每國中各省、各府、各縣之土音，如中國一般」と書かれるように、ポルトガル語、フランス語、スペイン語、イタリア語はラテン語に属し、これらの言語とラテン語の関係は、中国語の方言と中国語の如く、発音と文法は地方によって異なると著者が考えている。

「五、者耳馬尼話（此者耳馬尼話有文俗二様之不同） 六、法利米寔話 七、何蘭話 八、瑞話 九、黄旗話 十、英吉利話 十一、撒甸以話 十二、那耳歪話 十三、嚙士蘭話 此九様話，都由歌氏革話而出，又有人言，其俱由丢多尼革而出也。此丢多尼革字甚古的，令人不用之」と書かれるように、ドイツ語、法利米寔語、オランダ語、スウェーデン語、デンマーク語、英語、ザクセン語、アイスランド語、ノルウェー語はゲルマン語派に属し、「丢多尼革」から来たという言い方もある。「丢多尼革」の文字は非常に古くて、既に使用しないことになるミルン

3) モリソン、ウィリアム・ミルンなど編集『察世俗毎月統計伝』、1815-1821年、大英図書館蔵、第六巻、22-26頁。

が述べた。

「十四. 波蘭話

十五. 利士亞尼亞話

十六. 波希米亞話

十七. 得耳安西勒反以亞話

十八. 摩耳亞腓亞話

十九. 今之萬大安話。此一話，現在路撒是亞及百耳五是亞等地用的。

二十. 革耳瓦氏話。

二十一. 我羅斯話。

二十二. 加勒謨格話。此九樣話，俱是由斯格拉分以亞話而出。斯格拉分以亞原本之意，言奴才之話，因上古在又羅巴之北，有買奴才為自東邊各國來者。後來此奴才漸次生多，得權勢時，遂為橫行而散開于此北方之各國住居耳其話亦遂流行焉，但此斯格拉分以亞現今之意言尊也，貴也。

二十三. 加力即以耳士話。

二十四. 未勒寔話。

二十五. 唉耳以寔話。此三話俱在英吉利國而說的。

二十六. 巴士白耳以打英話。此一樣由亞耳亞比亞即回回話而出。

二十八. 現今之厄利革話。此一樣由古厄利革話而出。

二十九. 希比雷話。

三十. 古厄利革話。

三十一. 拉定話。此三樣話現今少有人說，但在國學中，文墨人為學此古語。希比雷一話，原本不屬有羅巴乃屬亞西亞而因為聖書本為在此話而寫的，所以此話得入有羅巴也。

除此三十一樣話外，還有三十二樣土話，為在有羅巴東北各地與近乎他之亞西亞地而說的，又現所說的三十一樣每一樣亦有其土話，其字之形象不過有七八樣不同，但其話之聲音則甚多樣也。非是每一國有一樣話，蓋有三四國共一樣話的，又有一國而用三四樣話的，至於此」と書き、原文に言及した31種類の言語を除き、また32種類方言はヨーロッパ東北部とその近くのアジアの地域で使用している。31種類の言語はそれと対応する方言がある。文字は約七、八種類がある。また、文字に対する発音はそれぞれあり、発音は多い。1国では特定な1種類の発音を使用することではなく、場合によって、3、4国で1種類の発音を共通し、1国で3、4種類の発音を共通することがある。第二篇では、31種類の名称を紹介するのみならず、語源について説明している。また、28国以外の地域の名称も言及している。ただし、考証できない地名もたくさん

出てくる。

表 2

中国語におけるヨーロッパ言語の書き方		対応の国
拉定話	ラテン語	ポルトガル、フランス、スペイン、イタリア
法利米寔話	なし	なし
噯士蘭話	アイスランド話	アイスランド
歌氏革話	ゲルマン語派	ドイツ、オランダ、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、ザクセン王国、アイスランド
丟多尼革話	なし	なし
斯格拉分以亜話	スラヴ語派	ポーランド、利士亜尼亞 ポヘミア王国、得耳安西勒反以亜、摩耳亜腓亜話、萬大、クロアチア、ロシア、加勒謨格話
利士亜尼亞話	なし	なし
百耳五是亜話	なし	なし
得耳安西勒反以亜話	なし	なし
摩耳亜腓亜話	なし	なし
萬大安話	なし	なし
革耳瓦氏話	現代クロアチア話	クロアチア
加勒謨格話	なし	なし
加力即以耳士話	スコットランド・ゲール語	スコットランド
未勒寔話	ウェールズ話	ウェールズ
唉耳以寔話	アイルランド話	アイルランド
巴士白耳以打英話	なし	なし
厄利革話、古厄利革話	ブルガリア話、古代ブルガリア話	ブルガリア
希比雷話	ヘブライ語	なし

上述の表から見ると、第二篇では、第一篇の「論有羅巴列国」で言及したにあるヨーロッパ各国に基づき、ヨーロッパ各国の言語を紹介するが、完全に対応するとは言えないが、順番が異なる。第一篇の「論有羅巴列国」で言及した地名以外に別の地域とその地域の言語が現れた。例えば、「法利米寔話」はラテン語に属するが、第一篇に対応する国がない。アイスランド、利士亜尼亞、得耳安西勒反以亜、摩耳亜腓亜話、萬大、クロアチア、加勒謨格の地名も第一篇では対応する地名は見つからなかった。「英吉利國」は第 1 篇で説明したが、その構成となるスコットランド、ウェールズ、アイルランドは言及しなかった。スラヴ語派はヨーロッパで広く使われている言語として、当時ヨーロッパの階層制度を反映した。ラテン語は当時のヨーロッパ強国のポルトガル、フランス、スペイン、イタリアで使用している主要な言語として、解説がある。また、「三十一・希比雷一話、原本不屬有羅巴乃屬亜西亞而因為聖書本為在此話而寫の、所以此話得入有羅巴也」と書かれるように、著者はヘブライ語は元々アジアに属する言語であるが、『聖書』はヘブライ語によって書かれるために、ヘブライ語はヨーロッパ言語の範囲に収

められるべきだと著者が主張した。従って、同書はヨーロッパの言語を紹介するのみならず、地名、宗教、階層制度も読者に紹介した。

二、『地理全志』に見られるヨーロッパ

1. 「歐羅巴志」について

『地理全志』におけるヨーロッパに関する文章は第二巻「歐羅巴志」の部分である。「歐羅巴志」冒頭の記述⁴⁾では「歐羅巴五洲之最小者、曠野居其二、山嶺居其一、海隅之地、灣泊甚多、田土腴脊不等、气候涼燠不同、人物薈萃、学藝絶倫、自古迄今、常推為首」と書かれるように、著者はこの50字数前後の描写でヨーロッパの地理情報を概況した。拙訳にすると、五洲におい

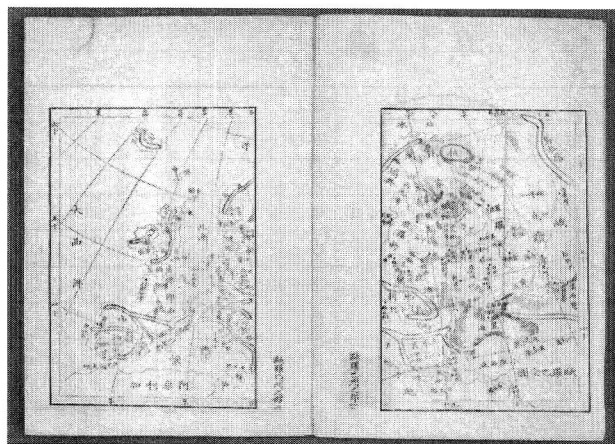


図 『地理全志』・「歐羅巴志」の挿絵

て、ヨーロッパの面積は最も小さくて、原野の面積は五州中の二位、山の数是一位に占める。かつ海に囲まれるため、湾と湖が多い。豊かな土地とやせた土地はバラバラある。気候と気温はそれぞれ異なる。また、人材、学術、芸術は絶妙である。古代以来、学術は世界首位だと言われる。読者に直観的にヨーロッパの状況を見せるために、著者は二枚の地図も付けていた。上記の図のように、ヨーロッパ全体一目瞭然に現れ、読者にとって理解しやすいだろう。

続いて、「文論」における「位」（位置）の部分では「洲内緯線自赤道北三十六度起、至七十一度止、経線自中華北京午線偏西三十八度起、至一百二十六度止」と書かれるように、ヨーロッパの位置を簡単に紹介している。著者は赤道、経線、緯線、度数など、専門的な地理用語を

4) Muirhead・William (ウィリアム・ミューヘッド) 輯訳『地理全志』、日本橋通（江戸）：山城屋佐兵衛、安政3-6 [1856-1859]、早稲田大学図書館、第二巻「歐羅巴志」、1-6頁。

用い、精確にヨーロッパの地球での位置を表記した。「界」の部分では「洲内東連亜西亜里海，西至大西洋，南至地中海，北枕北冰洋。」と書かれるように、ヨーロッパ周囲の大洋を紹介した。「廣」の部分では「洲内長八千里，廣一万二千里，總計之，方一千四百万里」と述べるように、ヨーロッパの面積を紹介した。

さらには、「質論」では、「山」（山）、「原」（平原）、「隅」（海岸線）、「角」（すみ）、「嶋」（島）、「海」（海）、「灣」（湾）、「岔」（海の分岐点）、「峡」（海峡）、「河」（川）、「湖」（湖）、「地氣」（気温）、「地寶」（自然資源）、「草木」（植物）、「生物」（生物）という15の方面から詳細でヨーロッパの地理状況、自然環境、動植物の状況を説明した。この部分の紹介はヨーロッパにおいて、有名な山、平原、海岸線、隅、島、海、湾、海の分岐、海峡、川、湖の名前を列挙するのみならず、それらの地質、地形もはっきり説明し、読者にとって非常に理解しやすいと考えられる。また、ヨーロッパの季節、気候、自然資源に関する紹介も付し、特に自然資源の部分では、著者は鉱物など化学物質の化学知識も言及した。植物と生き物の解説は生物の領域に関係するだろう。要するに、「質論」の一節では、全面的にヨーロッパに関する地理知識を紹介するのみならず、化学と生物の知識も紹介し、知識の伝播面では、多様性の性質も持っているとは言えよう。上述内容に関わる漢字の書き方は以下の表にまとめる。

表 3

中国語におけるヨーロッパ地名の書き方		現代地名	
西班牙	挨德納	スペイン	イタリアの火山
瑞士	挨哥拉	スイス	デンマークの火山
希臘	噢地利	ギリシャ	オーストリア
瑞顛	土耳其	スウェーデン	トルコ
瑞典	倫敦	スウェーデン	ロンドン
英國	巴黎斯	イギリス	パリ
以大利	荷蘭	イタリア	オランダ
維蘇威	噠國	ヴェスヴィオ火山	デンマーク
西治里	峨羅斯	シチリア島	ロシア

山	高加索山、比里牛斯山、烏拉嶺、亜卑山、亜卑尼奴山、巴幹山
平原	平原の名前は特に言及しない
海岸線	哥里米隅
すみ	北角、奈斯角、斯高角、蘭森角、合及角、非尼斯德角、三維森角、斯巴德温多角、盧加角、馬大極角
島	冰州島、發祿島、大英三島、亞索利數島、斯必巴然島、新森拉島、亞蘭數島、厄德蘭島、巴里利島、哥塞牙島、撒丁島、西西里島、馬達島、以阿尼島、干地島、希臘群島
海	白海、波羅地海、北海、阿尔蘭海、地中海、亞得亞海、希臘海、馬馬拉海、黑海、亞速海
湾	波得尼灣、芬蘭灣、利牙灣、波羅的灣、慕來灣、比斯加灣、雷昂灣、熱那灣、達蘭多灣、利極灣、威你斯灣、得利斯灣、加拉灣、澤加牙灣、阿尼牙灣、干日灣、美森灣

海の分岐点	英倫岔、三若岔、加的牙岔、加惹岔
海峡	孫德峡、大帶峡、小帶峡、奔蘭峡、多非峡、巴拉大峡、墨賽内峡、他大尼里峡、君士但丁峡、以尼加利峡
川	烏拉河、窩瓦河、尼瓦河、士未拿河、聶民河、維士都拉河、阿得河、北酌拉河、加拉河、美森河、阿尼加河、威塞河、來尼河、易北河、達迷斯河、恒北河、帶河、賽因河、盧尔河、加倫河、斗羅河、德克河、瓜達幾維河、羅尼河、尼波羅河、玻河、低伯河、多惱河、尼泊河、尼斯達河、敦河
湖	拉多牙湖、阿尼牙湖、賽美斯湖、北不斯湖、威那湖、威達湖、美拉湖、日内瓦湖、官斯丹湖
気温	北境严寒凛冽、経威不熱、中央燠咸宜、南方夏熱、冬温晴雨不均
自然資源	金、銀、錫、鉛、水銀、煤、鎂
植物	南方：無花果、橘、榴、橄欖、葡萄 中央：二麦豐聖、樹干雄偉 極北：草木甚稀、不过苔蘚、石葦
生物	熊、狐、豺、狼、豪、獾、麋鹿、兔、松鼠、羚羊、馬、牛、羊、豚、鷗、鳶、鷹、鷺、鷄、鴿、鴨、鵝、孔雀

第二篇の最後、「政論」では、「戸口」（人口）、「教門」（宗教）、「學藝」（腕前）、「史」（歴史）、「朝政」（政体）、「國」（国家）の6方面からヨーロッパを紹介した。冒頭の「戸口」（人口）、「教門」（宗教）の部分では「本州人民統計二萬三千萬口。州内之教奉耶穌清圣者居多。大同小異，唯土耳其全土，俄羅斯數部。崇回教其崇奉释犹太教者，寥寥無幾」と書かれるように、ヨーロッパの人口は2億3千万である。ヨーロッパにおいて、宗教の信者で、イエズス会を信仰する人は最も多く、トルコとロシアの一部分ではイスラム教またユダヤ教を信仰する人がいるが、人数が少ないと記述している。

続いて、「學藝」（腕前）の部分は他の部分より長く、著者は製造業、地理学、法律、芸術という四つの方面からヨーロッパ人の技能を高く評価した。「史」（歴史）の記述で著者は、「夏朝」、「漢朝」、「秦朝」、「五代」、「唐朝」、「宋朝」、「明朝」という中国王朝の順番を参照し、同時期ヨーロッパの王朝の歴史を紹介した。「朝政」（政体）では「州内朝政不一，或君自主，或與群臣共議，或無国君，立家宰執政，其中或帝，或王，公侯伯子男，或宰相總督，至某國君，係何爵位，皆詳明於後」と書かれるように、ヨーロッパにおいて、国々の政体は国によって異なり、君主制、共和制、議会制、立憲君主制などがある。皇帝、王、公侯伯子男、宰相などの職務がそれぞれあるが、その具代的な説明は後文で説明する。「國」（国家）では「州内國之大小不一，曰峩羅斯，瑞典，唵國，荷蘭，比利時，日耳曼列國，普魯士，奧地利，土耳其，希臘，以大利，瑞士，西班牙，葡萄牙，佛蘭西，大英」と書き、順番でヨーロッパの国を列挙している。「國」では出現している新たな国名の漢字書き方は以下の表にまとめる。

表 4

中国語におけるヨーロッパ国名の書き方	現代地名
俄羅斯	ロシア
比利時	ベルギー
日耳曼列國	ゲルマン諸国
普魯士	プロイセン
佛蘭西	フランス
大英	イギリス

2. 「大英國志」について

ここでなぜ「大英國志」⁵⁾のみ説明するだろう。『察世俗毎月統計伝』におけるヨーロッパ国の紹介は『地理全志』と重ねるのは英国だけであるので、両者における英国の比較により、両者の関係を明確するために、ここで「大英國志」の内容を分析しようと思われる。

『地理全志』の「歐羅巴志」では、ヨーロッパにおいて国の詳細な紹介は以下の順番である。「俄羅斯國志」、「瑞典國志」、「噠國志」、「荷蘭國志」、「比利時國志」、「日耳曼列國志」、「普魯士國志」、「奧地利國志」、「土耳其國志」、「希臘國志」、「以大利國志」、「瑞士國志」、「西班牙國志」、「葡萄牙國志」、「佛蘭西國志」、「大英國志」。「大英國志」ではイギリスを具体的に紹介し、「歐羅巴志」の一節の末に置かれる。内容としては、イギリス、スコットランド、アイスランドという三つに分けられて読者に紹介している。また、ここで注意に値するのは、イギリスの紹介ではウェールズの状況も言及されている。

「大英國志」の冒頭では、「大英，一名英吉利，在歐羅巴西北，强大之國也，緯線自赤道北五十度起，至五十八度半止，經線自中華北京偏西一百十五度起，至一百二十七度止，東界北海，西南北均接大西洋，地分三土，迤東兩土相連，南曰英倫，北曰蘇格蘭，西一島曰阿爾蘭，島嶼迴環，氣候溫和，時時更變，或重霧迷漫，或陰溼濛濛，四季皆然，不能雨暘時若，終歲寒日居多，雖盛夏未嘗有酷熱，冬則飄風霜雪，春林花嫣然，風景極清，地利不一，農勤稼穡，收穫殊豐。」と書かれるように、著者は赤道、緯線、経線などの自然地理学に関わる知識を用い、英国の位置、気候の特点、構成部分などの状況を説明した。

更に、「民性淳良，好礼義……女子亦觀詩養道修德，書畫針無術不精，男或為將農或為商賈……天文，地理，數學，格物致知……製造多用火輪船車……枪炮刀剑钟表及日用各種器皿……大舶航海者，歲計六萬艘，生利於國中者，歲計三十萬艘……奉耶穌正教，其天主教，阿爾蘭奉者十之八」と書かれるように、国民の道德、教育水準、風習、科学技術、学術、発明、国の實力を詳しく記述している。

続いては、「至於朝綱，國位男女皆得臨御，為以長幼為序，國制有二相，一理内，一治外，或

5) Muirhead・William (ウィリアム・ミューヘッド) 輯訳『地理全志』、日本橋通（江戸）：山城屋佐兵衛，安政3-6 [1856-1859]、早稲田大学図書館、第二巻「歐羅巴志」、49-56頁。

司帑藏或死出納，或權貿易，或聽訴獄，或掌玺印……按國傳史，古為土番部落，漢時羅馬平英倫，至今羅馬城闕，遺址尚存……宋時噶王侵擾，全土皆為所据，後三世歸于英國……蘇遂與英倫合為一國，稱曰大英……大敗佛于比利時之窩得路……遺命立兄女維多里為王，即今在位之君也」と書かれるように、英国の政治は、男女が問わず、役人になることができる。総理大臣は二人がいる。一人は国内の政治を担当し、他の一人は外交事務を担っている。ローマ帝国、デンマーク、フランスとの戦争も記載されている。スコットランドとイギリスの組み合わせの始末も記載されている。要するに、この部分では英国の政体、役人の階級及び職務上の役割を紹介する以外には、中国歴代王朝の時間割に従い、当時英国の歴史事件と戦争を記述している。

最後は、「通國分英倫，蘇格蘭，阿爾蘭，三土，英倫為其本境也，西界稍出山嶺，平野居多，長一千里，廣五百九十余里，總記方二十万里……土分五十二府……総名為威勒士……言語與英倫不同……氣候平和……土產磁器，銅，鍍，錫，鉛，煤，石監，羽毛，洋布，利器。

蘇格蘭，在英倫之北，長九百里，廣五百里，總計之方八万五千里，戶口二百六十万……地分三十三府……語言異于南方十二府……氣候寒冷，五谷不登，多漁業，土產石，煤，鍍，磁器，呢，羽，洋布。

阿爾蘭，在英倫之西，海港隔斷，別為一島，長七百八十里，廣六百里，總計之方十一萬里，居民八百万，地勢平原寬廣，岡嶺絕少，地多潞澤……分四部三十二府……土產石炭，煤，銅，鍍，錫，牲，布等」と書かれるように、イギリス、スコットランド、アイスランドの面積、主要な都市、交通情報、言語、特産などを記載している。

「歐羅巴志」における全ての国の紹介で、「大英國志」は最も詳細である。他の20国も「志」の形で記載している。このように、「歐羅巴志」では、一定の順序、法則に従ってヨーロッパの地質、地形、気候、生物などを紹介するが、『地理全志』表記方法を皮切りにして、以前地理著作で文章構成の規範化、内容の充実、地名に関する煩瑣の書き方を統一化の書き方へ導いていくとは言えるだろう。以下の表では、「大英國志」における英国の地名を整理するものである。

表5

中国語におけるヨーロッパ国名の書き方	現代地名
大英、英吉利	イギリス
英倫	イングランド
蘇格蘭	スコットランド
阿爾蘭	アイスランド

三、比較と小結

本文では、ウィリアム・ミルンの『察世俗毎月統計伝』とウィリアム・ミュアヘッドの『地理全志』を巡り、両者の地理学に関連する文章を解説し、内容を分析した。両書における漢字によりヨーロッパ地名の表記および地理と関わる他の知識をまとめ、両書の作者の立場を理解した上で、両書の相違点を以下のように明らかにした。

まず、二者の成書の立場、あるいは成書の目的ははっきり見えるだろう。ウィリアム・ミルンとウィリアム・ミュアヘッドは、二人ともロンドン伝道協会の宣教師として、来華の根本的な任務は布教である。『察世俗毎月統計伝』の文章から見ると、地理学に関する描写のみならず、イエズス教義のつながりは全文の始末では見つけられる。例えば、「英國土産所缺」の冒頭では、「此國産這樣、彼國産那樣物、非偶然之事、乃是造萬物之神天所定如此」と書かれるように、国々での不産物は偶然ではなく、神様の意識だとウィリアム・ミルンが指摘する。しかし、『地理全志』における同じく英国を紹介する「大英國志」では、ウィリアム・ミュアヘッドはイエズス教義を言及せず、赤道、緯線、経線などの自然地理学に関わる知識を用い、科学的方法で英国の位置、社会、歴史、民俗、風習、政体、特産を紹介し、『察世俗毎月統計伝』より、内容面に一層客観的、全面的で、記述方法も簡潔で理解しやすい。その他、『察世俗毎月統計伝』の「英國土産所缺」で単一の記述の方法と異なり、『地理全志』の「歐羅巴志」では、「大英國志」、「俄羅斯國志」、「瑞典國志」、「噠國志」など「志」の形式によりそれぞれヨーロッパの主な国家を読者に紹介し、『地理全志』の成書の規範性、分類方法の系統性も伺えるみだろう。

更に、両書における著者の自称の違いから著者の成書する立場が伺える。「英國土産所缺」では、中国の物産を基準として、英国で生産できないものを紹介する。西洋宣教師のウィリアム・ミルンは、中国人読者達が自分の文章を受け入れさせるため、「我中國」と、主観的に自称した。一方、「大英國志」では、西洋宣教師のウィリアム・ミュアヘッドが中立の立場に立ち、客観的に英国の各情報を紹介した。

続いて『察世俗毎月統計伝』における第二篇の「論有羅巴列国」では、28国の名前と都の漢字の書き方、また国々の言語を紹介しているが、地図を付けず、国の位置は確かめることができない。その他、同書で国名と都の漢字の表記だけ表したが、より一層詳細な記述がないため、今現在でも、この記述に対応する地域ははっきり判断することができないと思われる。例えば、「數亜比亜國」などの国である。このような国の地理に関する説明は非常に簡単で、文章の記述から手に入れる情報がかなり少ないので、読者にとって非常に理解しにくいと考えられる。それに対して、『地理全志』の「歐羅巴志」では、「位」（位置）、「界」（境界線）、「廣」（広さ）、「山」（山）、「原」（平原）、「隅」（海岸線）、「角」（すみ）、「嶋」（島）、「海」（海）、「灣」（湾）、「岔」（海の分岐点）、「峽」（海峡）、「河」（川）、「湖」（湖）、「地氣」（気温）、「地寶」（自然資

源)、「草木」(植物)、「生物」(生物)「戸口」(人口)、「教門」(宗教)、「學藝」(腕前)、「史」(歴史)、「朝政」(政体)、「國」(国家)という24個の方面からヨーロッパの20国を規範的で詳細に紹介し、後世の今からみれば、同書は地理学領域においてかなり価値があるとは違いないだろう。ただし、国々の言語に関わる説明では、『察世俗毎月統計伝』のほうがより詳細である。

最後、両書の比較により、中国語におけるヨーロッパ地名の変遷と地理学の進歩性、互いに継承する関係が見られると考えられる。地名の表記の対比は以下の表にまとめる。

表 6

『察世俗毎月統計伝』による ヨーロッパ地名の書き方		『地理全志』による ヨーロッパ地名の書き方		現代地名
波耳士加勒、西洋國	利士本	葡萄牙	里斯本	葡萄牙(里斯本) ポルトガル(リスボン)
土扁、大呂宋國	馬得利得	西班牙	馬德里	西班牙(马德里) スペイン(マドリード)
法蘭士、佛郎機國	巴而以士	佛朗西、佛蘭西、佛國	巴黎斯	法国(巴黎) フランス(パリ)
尼得耳蘭士何蘭國	百耳五士勒士、 亜麥士得耳大麥	何蘭國	俺特坦	荷兰(阿姆斯特丹) オランダ(アムステルダム)
應蘭得、英吉利國	倫頓	英吉利、大英	倫敦	英国(伦敦) イギリス(ロンドン)
士未士耳蘭國	「なし」と書いた	瑞士	伯爾尼	瑞士(伯尔尼) スイス(ベルン)
士未點、瑞國	士托何勒麥	瑞國、瑞頓、瑞典	斯德哥摩	瑞典(スウェーデン) スウェーデン(ストックホルム)
顛馬耳革、黃旗國	個便士斤	噠國	哥卑合給	丹麦(哥本哈根) デンマーク(コペンハーゲン)
那耳歪國	革利士氏亞尼亞	那威	なし	挪威(オスロ) ノルウェー(オスロ)旧称クリ スチャニア
耳五沙、我羅斯國	比得耳士布耳革	峨羅斯國、戕羅斯	墨斯科	俄罗斯(圣彼得堡) ロシア(サンクトペテルブルク)
百耳五是亞、布路西亞國	百耳林	普魯士	伯靈	普魯士(柏林) プロイセン(ベルリン)
波蘭得、波羅尼亞國	個寧士百耳革	波蘭	なし	波兰 ポーランド(都を考証できない)
撒甸以國	得耳以士頓	薩克撒(「日耳曼列國 志」に記載している)	なし	萨克森王国(多莱斯登) ザクセン王国(ドレスデン)
阿士得耳以亞國、者耳馬 尼	腓然亞	奧地利	維也納	奥地利(维也纳) オーストリア(ウィーン)
未士得法利亞國	門士得耳	なし	なし	威斯特法伦王国(卡塞尔) ヴェストファーレン王国(カッ セル)
巴法耳以亞國、巴瓦利亞	母尼革	巴威里亞(「日耳曼列 國志」に記載している)	慕尼克	巴伐利亚王国(慕尼黑) バイエルン王国(ミュンヘン)

紅加以、江亜利亜國	百利士布耳革、布大	匈牙利	なし	匈牙利（布达佩ス） ハンガリー（ブダペスト）
數亜比亜國	巴顛	なし	なし	考証できない
摩耳亜腓亜國	阿勒末字	なし	なし	摩尔达维亚公国 モルダヴィア公国（都を考証できない）
波希米亜國	百耳噯革	なし	なし	捷克（布拉格） チェコ、旧称：ボヘミア王国（プラハ）
土耳其、度爾格國	根士但顛阿百勒	土耳其	君士坦丁	土耳其（君士坦丁堡） トルコ（コンスタンティノープル）
撒耳氏尼亞國	加革利亞利	撒丁	なし	撒丁王国（カリヤリ） サルデーニャ王国（カリヤリ）
西色利國	巴勒耳摩	西治里、西西里	巴勒摩	西西里王国（巴勒莫） シチリア王国（パレルモ）
意大利亜國	羅馬	以大利	羅馬	意大利（罗马） イタリア（ローマ）
尼百勒士國	尼百勒士	なし	なし	那不勒斯王国（那不勒斯） ナポリ王国（ナポリ）
噯阿尼安噯勒士、七洲國	可耳付	希臘	雅典	希腊（雅典） ギリシャ（アテネ）
利士亜尼亞國	未勒那	なし	なし	立陶宛（维尔纽斯） リトアニア（ヴィリニウス）
得耳安西勒反以亜國	黒耳満士達	なし	なし	トランシルヴァニア公国 トランシルヴァニア公国（都を考証できい）
なし	なし	比利時	比律悉	比利时（布鲁塞尔） ベルギー（ブリュッセル）

この表を観察して見ると、『地理全志』に記載されるヨーロッパ国と都の数は『察世俗毎月統計伝』より少ない。しかも、中国語におけるヨーロッパ国名と都の書き方も少ない。また、『地理全志』で漢字の使いがより統一化、規範化、簡易化の特徴がある。『地理全志』では、『察世俗毎月統計伝』と同しく、類似する方法を使用して地名を表す所がかなりあると気がつく。例えば、「法蘭士」と「法郎西」、「意大利亜」と「以大利」である。完全に一致する表記もある。例えば、「土耳其」である。『地理全志』における都の書き方は現代の書き方とほぼ同じである。例えば、「里斯本」、「馬德里」、「雅典」などである。その他、『察世俗毎月統計伝』と異なり、『地理全志』では小国など周知されない国の記載は削除される。例えば、「未士得法利亜國」、「尼百勒士國」などである。

要するに、『察世俗毎月統計伝』と『地理全志』におけるヨーロッパ地名の書き方の比較によると、『地理全志』は『察世俗毎月統計伝』を参照して成書した可能性があると推測する。また、『地理全志』は地理学の専門書として、同書における地名の命名は後世にも影響を与えた。